錨をあげて

滋賀県横山岳で出合ったイカリソウ

世間の荒波にもまれて過ごしてきた半世紀。ひとそれぞれ荒波の大きさ高さは違っていただろうが、その時々の時世・状況に応じて方向を定め、舵をとりながら進み続けてきた。その航海も今、それぞれの母港に戻り、錨をおろしてアンカリングし、駆使してきた船体をいたわり、あちこち補修に余念がない状況か。

『MELCO 丸』という大形船の中で、精いっぱいのパワーを出し合い、目指す航海の先に目標としてきた“企業の夢・個人の夢”を描きながら航海してきた。

思えば、『〇〇景気』に船体を大きく揺らせながら進んだ航路もあった。かと思えば、仕事量が少なく、『帰休』という“か細い錨”を、港でもないところに下して停泊した不安な航路もあった。

MELCO 丸も、ときには不本意な錨を幾度か下しながら航海してきた結果の今がある。

船は錨を下せば安定する。人は腰を据えれば底力を発揮する。

錨は船にとっては欠かせない装具であり、活力ある船体から吊り下がる錨には輝きが感じ取れる。進水式で眺める“威風堂々”とした錨の姿に、誰しも畏敬の念を持って滑りゆく船体を見送った。

さあ、人それぞれ残された人生を航海する My ship。新たな目標に向かって進む航路にしろ、あちこち立ち寄る港で、ご当地自慢を楽しむ航海にしろ、度々錨を上げ下げさせながら進んでいくことになる。

いまさら荒波に漕ぎ出すこともないと思えば、備える錨もそんなに重厚なものでなくてもよい。残された航路に向かって、スマートな錨を横たえながらこれからの航行を楽しもう。To weigh anchor　さあ　錨をあげて！

（ひしのみ 133 号　写真と文 菅田 忠志）